

[資料・その他]

看護学科における模擬患者参加型授業と OSCE の実施・評価（その2）
— 演習の運営 —木浪 智佳子¹⁾, 明野 伸次¹⁾, 西村 歌織¹⁾, 畑江 郁子¹⁾, 川崎 ゆかり¹⁾, 川合 美奈²⁾

1) 北海道医療大学看護福祉学部看護学科

2) 聖徳大学看護学部看護学科

キーワード

模擬患者参加型授業, OSCE, 演習

I. はじめに

本編では、科目開講に向けて平成24～25年度に行った準備期間中の活動と平成26～27年度の授業の実施および評価について報告する。

II. 単元班の役割

単元班の役割は、「看護実践演習」30時間の授業運営である。平成26年度の科目開講に向け、平成24～25年度は授業内容および方法の検討を行った。開講初年度にあたる平成26年度は、当該科目1単位（30時間・演習回数15回）分の授業運営を実施した。模擬患者に対しては、模擬患者参加型演習に関する説明会で授業内容や自由模擬患者に期待する役割の説明と演技練習を行った。平成27年度は前年度の演習と授業評価の結果を踏まえ、学習内容とその方法を見直し演習の企画・運営を実施した（表1）。

III. 活動の軌跡

1. 平成24～25年度：授業実施までの準備

1) 授業指導案の検討

本学科におけるカリキュラム検討委員会で設定された科目の学習目標「1. 援助的人間関係のためのコミュニケーションがとれる。2. 対象理解のための観察ができ、得られた情報の意味をその場で判断できる。3. 対象者の特性と状況に応じた説明ができる。4. 原理・原則を踏まえ、対象の状況に応じた看護技術を実践できる」に基づき、30時間・授業回数15回の授業指導案を検討した。指導案の作成に先立ち、学習目標の到達度がより具体的に示されるために学習目標ごとの行動目標を設定した。行動目標を設定するうえで考慮した点は、2年次の既習科目との区別である。本科目は3年前期の履修科目であり、学生は学内での基礎看護技術演習や基礎看護学実習を経験している状況で

ある。また、学習目標に掲げられたコミュニケーション技術や原理・原則を踏まえた看護技術の習得は、2年次の学習内容として含まれる要素でもある。このような学生の学習レディネスの状況を考慮し、本科目の学習目標を位置づけた。また、行動目標の下位目標として具体的行動目標も設定した。これは行動目標の到達状況の指標となり、後述する演習課題の内容が反映されたものとした。

授業形式は演習形式とし、学生約120名が一斉に履修することから、ベッドサイドでの演習と教室での演習が可能となるように2課題を設定し、学生が両課題の演習に取り組むための授業構成を検討した。演習15回の内訳は、演習1課題につき演習回数を全7回とし、主な構成内容には「課題の事前学習」、「ロールプレイングを用いた演習」、「まとめのグループワーク」、最終回を「OSCEの説明」とした。

2) 演習課題の検討

課題の設定は学生の学習レディネスを考慮し、事例の疾患・病態生理の内容が3年次までの既習内容であること、実践する看護技術は学生が臨地実習で単独で実施できる技術項目であることを考慮し設定した。看護技術内容の検討には、「看護実践能力育成の充実に向けた大学卒業時の到達目標：学士課程で育成される看護実践能力の大項目・細項目」（『看護学教育の在り方に関する検討会報告会』2004年、文部科学省）と本学の看護学科7領域（基礎・成人・老年・地域・母性・小児・精神）で示している臨地実習で学生が実施する看護技術項目を参考資料とした。

開講初年度の演習課題は、事例患者に対するフィジカルアセスメントと日常生活援助の実践に関する課題（「慢性閉塞性肺疾患患者に対する日常生活援助」と事例患者に対する検査説明に関する課題（「経口的上部消化管内視鏡検査を受ける患者への説明」）の2課題とした。

<連絡先>

木浪 智佳子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

表1 平成24～27年度における単元班の構成メンバー（五十音順）

平成24年度	明野伸次, 川崎ゆかり, 木浪智佳子, 舘山光子, 難波香織
平成25年度	明野伸次, 川合美奈, 木浪智佳子, 舘山光子, 長瀬亜岐, 西村歌織, 畑江郁子
平成26年度	明野伸次, 木浪智佳子, 長瀬亜岐, 西村歌織, 畑江郁子
平成27年度	明野伸次, 川崎ゆかり, 木浪智佳子, 西村歌織, 長谷佳子（アドバイザー）

3) 学習方法の検討

授業は演習形式で運営した。学生を3名／Gでグループ編成し、グループ担当の教員を配置した。グループワークや技術演習の内容に合わせて、グループ数を調整した。

4) 授業指導要領「学習要項」と「教員用手引き」の作成

本科目は看護学科の教員全員が担当するため、学生の学習効果を促進するためにも教員から演習および指導内容についての共通理解を得ることが必須となる。そのため、教材として「平成26年度看護実践演習学習要項」と「平成26年度看護実践演習教員用手引き」を作成し、教員に対して説明会を開催し、学習目標や授業の運営方法、指導指針についての説明と意見交換を行い、教員間の共通理解を深めた。なお、この作業は平成27年度も同様に行った（資料1）。

5) 模擬演習の実施

グループワークや演習といった学習方法に適した学習環境を確保するために、平成25年度は模擬演習を実施した。模擬演習では、看護実践演習プロジェクト委員が、学生・教員・患者役となり、検査の説明や血圧測定を行う場面を演じることで教室や実習室の空間の調整、音環境の調整の参考とした。さらに、ロールプレイ場면을撮影した映像を実践の振り返りとして活用する目的でタブレットを試用し、教材機器としての適性を検討した。

6) 「看護実践演習」シラバスの作成

平成26年度のシラバス作成に際し、単元班が主に素案を作成した後、プロジェクト委員会で検討した。さらに、本学部看護学科会議での提示および検討を経た後、最終的な確定とした。なお、この作業は平成27年度も同様に行った（資料2）。

2. 平成26～27年度：授業実施

1) 平成26年度の授業実施

初年度の演習課題は「課題1：経口的上部消化管内視鏡検査を受ける患者への説明」、「課題2：慢性閉塞性肺疾患患者に対する日常生活援助」の2課題を設定した。学生120名を3名／Gの40グループに編成し、

教員15名でグループ担当を行った。学生はこれらの課題に対してグループ学習、学生同士でのロールプレイを行うチャレンジ編、模擬患者に対してロールプレイを行う模擬患者参加編、さらに模擬患者参加編を踏まえたまとめとして、学生同士のロールプレイを再度実施するまとめ編に取り組んだ。また、14回目の演習ではOSCE課題への対応力を備えるための準備として、課題の事例患者に実施した更衣の援助以外の日常生活援助を考えることができるような事例と課題を提示し、グループワークと発表の機会とした。

2) 平成27年度の授業実施

前年度の授業評価を参考に平成27年度の授業内容を検討した。前年度、学生からの評価が低かったのは「演習場面の映像を振り返りに活用した」、「映像は自分の学習に役立っていた」の2項目が顕著だった。また、教員からの評価でも演習とグループ指導の両方において「演習場面の映像を指導に活用できた」という項目が低かった。その他に評価の低かった項目は「15回の構成（課題1：演習7回、課題2：演習7回、まとめ・OSCEの説明1回）は適切だった」が低かった。授業の内容に関する意見では、「課題で設定した事例患者の疾患や日常生活援助についての知識に関するレクチャーが必要である」という意見も多かった。また、3年後期の臨地実習に向けて、基本的な観察技術や援助技術の復習も必要であることが検討された。

これらの評価を参考に当該年度は演習課題を1つに減らし、前年度の評価の改善が図れるような授業構成を検討した。前年度の評価が低かった項目の改善策としては、演習の初回で事例患者の疾患や日常生活援助に関する説明の時間を設定し、2年次で学習した知識の復習に当てた。このような時間を設けたことは、学生にとって演習を展開するうえでの準備の機会であることは言うまでもないが、教員にとっても事例患者を理解し指導の手掛かりをつかむ機会として有意義な時間となった。

演習場面の映像を学習の振り返りに活用することが不十分だった要因としては、ロールプレイングでのフィードバックの時間が短かったことや、映像を見直す作業に時間を要することから、演習時間内では活用しきれないことが判明した。学生にとって、ロールプレイングにおける自身の行動を映像により客観的に評価

資料1 平成27年度看護実践演習の「学習要項」と「教員用手引き」(一部抜粋)

要項は各自のリングファイルに綴じて使用する

平成27年度 看護実践演習
学習要項

北海道医療大学 看護福祉学部
看護学科 3年

学生番号 _____ 学生氏名 _____

演習グループ _____ グループ _____

看護実践演習 第3学年 前期 必修 1単位 担当：看護学科教員

【概要】
3年次の臨地実習に必要な基礎的実践能力の修得を目指し、ロールプレイングを取り入れたグループ学習によって対象の状況に応じた看護技術を実践的に学ぶ。基礎的実践能力の習得に關しては、OSCE (Objective Structured Clinical Examination: 模擬患者参加による客観的臨床能力試験)によって評価を受け、自己の課題を明らかにする。

【演習課題】
1. 慢性閉塞性肺疾患で急性増悪期にある対象者に対しフィジカルアセスメントを実施する。
2. 回復期にある対象者に対して、日常生活行動の方法についての説明をロールプレイを通して実施する。
3. 回復期にある対象者のフィジカルアセスメントおよび更衣交換を学生同士、模擬患者に対して実施する。

【学習目標】
1. 援助的人間関係形成のための適切なコミュニケーションがとれる。
2. 対象理解のための観察ができ、得られた情報の意味をその場で判断できる。
3. 対象者の特性と状況に応じた説明ができる。
4. 原理・原則を踏まえ、対象の状況に応じた看護技術を実践できる。

平成27年度 看護実践演習
教員用 手引き

看護実践演習の指導に関して

1. グループの編成に関して
・各講座から担当者を選出。担当割り当ては学習要項のグループ担当表を参照。
総括教員：佐々木（全体総括）、木渡・西村・明野（律）

2. 担当教員の役割
・総括教員と共同し、1) グループワーク、実践の指導、評価、2) 事後学習・事後学習の確認とアドバイス、3) グループ運営に関する指導、4) 出欠席の把握、演習環境の準備、を行う。

1) グループワーク、実践の指導、評価
・グループワーク：アセスメントに基づく実践を共有できているかのアドバイス
→事前学習の知識やアセスメントを活用し、看護目標および方法を立案できているか。
看護計画に基づく、具体的な行動の組み立てができているか。
上記内容をグループで共有し、アセスメントや看護目標の修正や追加ができているか。
・実践：課題の学習目標、到達目標に応じて、授業時間内に巡回しながら実践内容を確認しタイムリーにフィードバックをする。フィードバックした内容について学生がどのように感じているかを確認し学生が自らの課題を認識して、自己学習に取り組めるようにする。
一援助者としてふさわしい言葉遣いできているか/原理・原則にそった技術を提供できているか/事後学習の知識やアセスメントを活用し実践できているか など

2) 事前学習・事後学習の確認とアドバイス
・事前学習：ヒグオの振聴（基礎看護学実習室か母子看護学実習室）、ワークシートの書き込み、資料や文献の活用ができているか。
・事後学習：ワークシートの確認と返却（提出日と返却日は学習要項を参照）。
出来ている点、課題となる点をコメントする。アドバイスのポイントは資料参照。
提出状況の確認は各担当教員が把握し、未提出や提出遅延および内容が十分でない場合は担当教員が個別に面談するなどして対応する。
自己学習の取り組みの確認（必要時、実習室などで技術の確認や練習ができているか）、実習室は2年生と共有のため譲り合って使用するように伝える。また、基礎看護学実習室は平日の9時～19時半まで使用できる。使用できない日時に關しては実習室のカレンダーに記載があるので確認するように伝える。5
・ワークシートの提出と提出点：出欠・ワークシート提出表に提出の有無を記入する。提出遅延、未提出は減点となる。1日遅れる毎に1点ずつ減点、当日の提出時間の超過も1点減点とする。

3) グループ運営に関する指導
・使用ベッドを事前に作成できているか確認（3～13回の演習）。作成は火曜日（前日）の14時～17時（学習要項に記載あり）。
・授業開始前に学習要項を参考に各回に必要な物品の準備ができているか確認。授業開始時からグループワークが始められるように指導。
・グループワークの進め方の確認（司会などの役割を決めているか、時間の管理ができているか）、主体的に話し合いが進められるようにファシリテートする。
・演習中の時間管理は学生が行うよう指導する。
・後片付けの声かけ、iPadの管理状況の確認

4) 出欠席の把握、演習環境の準備
・出欠の確認は各担当教員が把握し、各自が担当するグループの出欠表に記載する。
欠席・遅刻者がいた場合は、授業終了後に総括者（講義の総括者）に直接伝える。
・事前の準備は、原則、火曜日の15時40分にプロジェクト委員および各講義の担当教員が行う。

資料2 平成27年度看護実践演習のシラバス

【看護実践演習】		【演習】 第3学年 前期 必修 1単位	
《担当者名》看護学科全教員（生命基礎科学の教員を除く）			
【概要】			
3年次の臨地実習に必要な基礎的看護実践能力の修得を目指し、ロールプレイングを取り入れたグループ学習を通して学ぶ、基礎的看護実践能力の習得に関しては、OSCE（模擬患者参加による客観的臨床能力試験）によって評価を受け、自己の課題を明らかにする。			
【学習目標】			
1. 援助的人間関係形成のための適切なコミュニケーションがとれる。			
2. 対象理解のための観察ができ、得られた情報の意味をその場で判断できる。			
3. 対象者の特性と状況に応じた説明ができる。			
4. 原理・原則を踏まえ、対象者の状況にあわせた看護技術を実践できる。			
【学習内容】			
回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	看護実践演習の目的と構成	科目のねらいと学習の進め方の理解 事例と課題の提示（慢性閉塞性肺疾患、糖尿病）	全体統括教員他 20名
2	事例の理解①	対象の健康問題の理解と症状による苦痛、日常生活状況の理解 と具体的なイメージ化 看護実践に必要な知識の整理	全体統括教員他 20名
3・4	フィジカルアセスメント①	対象に必要な観察内容の確認と実践 対象者の状況に合わせた正確な測定と観察 バイタルサインズ測定の技術強化 症状の観察、視診・触診・聴診（呼吸音）の確認	全体統括教員他 20名
5・6	フィジカルアセスメント②	対象に必要な観察の実践とその意味の判断 バイタルサインズ測定、症状の観察、視診・触診・聴診（呼吸音）の実践 アセスメントを含めた報告 適切なコミュニケーションを取りながらの観察 これまでの達成度の評価	全体統括教員他 20名
7	事例の理解②	これまでの演習を振り返り、目標達成度と今後の課題の明確化 次回以降の事例の追加情報と課題の提示（慢性閉塞性肺疾患、安定期～回復期）	全体統括教員他 20名
8・9	日常生活援助の実践①	対象の状況に応じた日常生活援助（更衣交換）	全体統括教員他 20名
10・11	日常生活援助の実践②	対象の状況に応じた日常生活援助（環境調整・更衣交換） 日常生活上の留意点（更衣交換時の留意点）の説明	全体統括教員他 20名
12・13	日常生活援助の実践③ -模擬患者への実践-	模擬患者を対象にしたフィジカルアセスメントと日常生活援助（環境調整・更衣交換）	全体統括教員他 20名
14	全体まとめ・評価	模擬患者に対する実践の評価 臨地実習に向けての課題の明確化	全体統括教員他 20名
15	実技試験（OSCE）の説明	実技試験（OSCE）の目的、課題、実施方法、評価等の説明	全体統括教員他 20名

【評価方法】
課題 20%、最終実技試験（OSCE）80%
実技試験（OSCE）は前期末試験期間（1日）で行う。
追再試験は後期の模擬実習前に行う。
不合格者にはフィードバックし、再試験に向けての技術指導を（補講）を行う。

【備考】
教科書：課題事例、学習内容に関連する読習科目の教科書
参考書：必要に応じてその都度提示する。

【学習の準備】
1. 課題事例に関連した2年までの履修専門科目（人体構造学、人体機能学、看護技術各論、看護技術演習、成人看護論、成人看護学論など）を復習し読むこと。
2. 提示された課題に取り組み、演習内容を理解した上で臨むこと。
3. 実技試験（OSCE）は、原則、模擬患者への看護実践を行った上で受験すること。

することは、臨地実習前の自己課題を明確にするという点でも意義のあることである。そのため、平成27年度はロールプレイングにおける映像の活用を意識し、フィードバックの時間を前年度よりも長く確保した。また、グループの担当教員が演習場面の撮影を行い、指導場面に活かせるようにしたことも平成27年度の改善点である。加えて、12・13回目の模擬患者参加編の演習の振り返りを14回目のグループワーク演習で行い、ここでも映像の振り返りができるようにした。

以上の検討を重ねた結果、平成27年度は演習課題を1課題（「慢性閉塞性肺疾患で急性増悪期にある対象者に対するフィジカルアセスメントと日常生活援助の実施」）に設定し、15回の授業構成を割当てた。演習形式はグループ形式で前年度と概ね同様とし、ワークシートの活用も引き続き実施した。

3) 教員に向けた演習の説明と実施および振り返り

本科目は、看護学科の全教員が担当する科目である。そのため、科目の開講にあたり、科目の位置づけは勿論のこと、授業のねらい、授業のすすめ方、指導指針について教員間の共通理解を図る必要があった。その一環として、前述した「看護実践演習学習要項」と「看護実践演習教員用手引き」を作成し、全教員に対しての説明会を事前に開催し意見交換を行った。この説明会は、翌年も実施した。

初年度、演習日の前日に準備時間を設定し、教員へ翌日の演習内容を説明した。その後、実習室や使用教室の準備を行った。演習終了後は授業を担当した教員との意見交換をもとに演習内容の振り返りを毎回行った。その後、単元班メンバーでのミーティングを開催し、意見交換の内容と次回の授業内容・運営方法とのすり合わせを行い、変更点等の情報を次回の授業までに担当教員に伝達した。

平成27年度の演習の説明と準備は前年度と同様に行い、毎回の教員との意見交換による振り返りは学内メールを介して情報交換を行った。

4) 模擬患者に向けた演習の説明と実施

模擬患者に向けた演習内容の説明は、SP 班主催のSP 説明会でを行った。主な内容は、演習課題で設定した事例患者の疾患や行動の特徴がイメージできるような説明、ロールプレイングでの自由模擬患者として期待する役割や演技練習を行った。単元班の準備としては、演技練習の際の教員によるデモンストレーションや演技のシナリオ作成を行った。

3. 平成26～27年度の授業評価

授業評価は、最終回の授業終了後に学生と教員に対して一斉に実施した。学生を対象とした評価内容は、ワークシートやロールプレイング形式を取り入れたこ

とによる学習効果、映像の活用と効果、自己課題の明確化の状況等とした。教員を対象とした評価内容は授業内容や運営および指導体制の妥当性、全教員が科目を担当することの利点等とした。SP に対する授業評価は、SP 参加型演習が終了した後に実施した。評価内容は、演習に参加した際の疲労感や学生へのフィードバックに関する内容とした。学生からの評価では、平成26年度の授業評価の詳細は前掲2-2)の通りである。平成27年度では、ワークシートやロールプレイング形式の学習、SP 参加型演習は、概ね学習効果があったという結果が得られた。特に、SP によるフィードバックから患者の気持ちを知ることや自分の課題を知る効果を感じたことへの評価が高かった。さらに、自由記載の回答からは「知識・技術の復習の必要性」「グループワークによる学びの効果」「患者が理解できるような説明」「患者の状況に応じた援助の工夫の必要性」を挙げており、臨地実習に向けての学習意欲の高まり、自己の課題を明確にできたという声も多かった。

教員は、SP 参加型演習の学習効果を高く評価しており、全教員が関わったことの利点として、「学生の学習状況が把握できた」「教員間で教育内容や方法に関する意見交換ができた」といった内容を評価していた。一方で、教員が担当する学生数の妥当性についての評価は低く、グループワークの運営や技術指導の面では困難感を抱いたという回答がみられた。

初年度、学生と教員の両者から評価が低かった「映像の活用」に関する項目の評価点は平成27年度の結果では改善されていた。

SP からの評価は概ね高評価であり、演習参加による疲労感も少ないという回答であった。詳細については、SP 班から報告する。

なお、授業評価は本学の倫理審査委員会の承認のもと実施している。

IV. 今後の課題

これまでにも年度ごとの評価結果を踏まえて、授業内容や構成、運営方法についての改善を図ってきた。その効果は授業実施2年目の評価にも反映されていた。学生の科目に対する感想には「たくさん緊張した」「頭を使った」「実践的で役に立った」「実習の練習になった」といったことが挙げられていた。学生は本科目を通して、技術演習場面における臨場感を体感し、患者の状況に応じた看護援助をあれこれと考えながら実践するという体験をしていることを窺知した。今後の課題は、グループ演習における教員のファシリテート力を充実させること、SP のフィードバックに並行し、教員が行う専門的な視点からのフィードバックを充実させることである。教員がこのような能力を強化することにより、技術演習場面においても学生の

資料3 平成27年度の学習目標、講義日程表、ワークシート（一部抜粋）

【学習目標・行動目標】

学習目標を達成するための行動目標を以下とする。単元ごとに、どの目標の達成を目指すのか要項に示されているので、目標を確認しながら演習を進めること。

学習目標	行動目標	具体的行動目標
1. 援助的人間関係形成のための適切なコミュニケーションがとれる。	1) 対象者に不快感を与えないことのない身だしなみ・態度・言葉遣いをする。	①清潔なユニフォームを着用している ②着た髪型に顔面をふさいでいる ③化粧をする場合は、清潔な印象を与えるものにする ④姿勢が正しい ⑤敬語・丁寧語を使うことができる
2. 対象理解のための観察ができ、得られた情報の意味をその場で判断できる。	2) 基本的なコミュニケーションの技術を用いる。	①対象者にあいさつ・自己紹介ができる ②対象者と目線に合わせて顔をすることが出来る ③適度なうなずきや表情などで共感的態度を示すことができる
3. 対象の特性と状況に応じた説明ができる。	3) 説明と同意および対象者の反応を確認する。	①対象者の名前をフルネームで確認できる ②実施について同意を得ることができる ③対象者の状態を確認できる ④対象者の状態を適宜確認できる ⑤慢性閉塞性肺疾患の病期および症状が進行するメカニズムを覚える ⑥慢性閉塞性肺疾患の病期分岐を覚える ⑦慢性閉塞性肺疾患の検査と診断基準を覚える
4. 原則・原則を踏まえ、対象の状況に応じた看護技術を実践できる。	4) 主観的情報および視診で必要な情報を得る。	①体温計の先端を腋窩の最深部に挿入し体温を測定できる ②中三指の指腹を動脈にあてて脈拍を測定できる ③対象者に呼吸を聴きながら呼吸を測定できる ④パルスオキシメーターを正確に酸素飽和度を測定できる ⑤アネロイド血圧計、電子血圧計を用いて血圧を測定できる ⑥優先順位を考慮して測定できる
	5) 聴覚検査を適切に行うための確認をする。	①聴力検査の有無を確認できる ②口を開き、舌を噛みしめ、サアノーザの有無を確認できる ③呼吸状態の自覚症状を聞くことができる
	6) ベッドサイドで得られた情報の正常・異常を判断する。	①1分呼吸不全患者の目標値(94%±5%)を覚える ②鼻の指示をともに、酸素流量、チューブの接続部の外れ、ゆるみ、折れが無いか確認できる ③正常呼吸音と異常呼吸音の区別ができる ④測定したバイタルサインを基準値と比較できる ⑤慢性閉塞性肺疾患の病期により、酸素化が保たれているかを判断できる ⑥慢性閉塞性肺疾患に伴う症状の有無を覚える
	7) 対象者に適切な援助方法について行動を組み立てる。	①活動耐性の低下を評価できる ②呼吸ができるだけ楽な体位を考案できる ③対象者の可能な行動を考案することができる ④看護者が援助する行為を考案し計画することができる
	8) 対象者にフィジカルアセスメントの結果を説明する。	①呼吸音の結果を説明できる ②バイタルサインの結果を説明できる ③視診で得られた内容を説明できる
	9) 対象者に日常生活動作の方法を説明する。	①対象者の不安や恐怖に配慮した言葉がけができる ②対象者に、必要な呼吸法(うすげほ呼吸、腹式呼吸)を説明し演習できる ③日常生活動作における注意点を説明できる
	10) 対象者の意向を確認し、適切な体位交換の方法を検討する。	①対象者のフィジカルアセスメントの結果、事前に考えた行為を実施できるか判断できる ②体位交換の方法を確認し、対象者の意向を尋ねることができる ③O2に基づく体位交換の方法を患者者に示すことができる
	11) 対象者に適切な体位交換を実施する。	①対象者の動きを少なく、体位が楽な方法と体位を換えることができる ②効果的体位(屈曲位、伸展位、肘をつく姿勢)を提案し見られる ③動作の合間に安楽な呼吸法を促すことができる ④安静時と動作後のバイタルサイン、主観的変化をモニタリングできる ⑤必要時二部式酸素の交換の介助(足交換、ズボンの上げ下ろし)ができる ⑥体位交換後の対象者の状態を確認できる
	12) 対象者が安全安楽に過ごすための環境を整える。	①対象者への援助の際、手洗消毒が実施できる ②室温・湿度の確認ができる ③ベッド上、ベッド周囲を整えることができる ④患者の生活環境に必要に必要なものを確認し、整えることができる

看護実践演習 スケジュール

日 時	講義内容			
	回	1~9グループ	回	10~18グループ
4/8 (水) I 講目	1回	看護実践演習の目的と構成	1回	看護実践演習の目的と構成
4/8 (水) II 講目	2回	事例の理解	2回	事例の理解
4/15 (水) I 講目	3回	フィジカルアセスメント①		
4/15 (水) II 講目	4回			
4/22 (水) I 講目			3回	フィジカルアセスメント①
4/22 (水) II 講目			4回	
5/13 (水) I 講目	5回	フィジカルアセスメント②		
5/13 (水) II 講目	6回			
5/20 (水) I 講目			5回	フィジカルアセスメント②
5/20 (水) II 講目			6回	
5/27 (水) I 講目	7回	日常生活援助の実践① (日常生活動作の説明の準備)	7回	日常生活援助の実践① (日常生活動作の説明の準備)
6/3 (水) I 講目	8回	日常生活援助の実践② (日常生活動作の説明)		
6/3 (水) II 講目	9回			
6/10 (水) I 講目			8回	日常生活援助の実践② (日常生活動作の説明)
6/10 (水) II 講目			9回	
6/17 (水) I 講目	10回	日常生活援助の実践③ (寝衣交換)		
6/17 (水) II 講目	11回			
6/24 (水) I 講目			10回	日常生活援助の実践③ (寝衣交換)
6/24 (水) II 講目			11回	
7/1 (水) I 講目	12回	日常生活援助の実践④ (模擬患者への寝衣交換)		
7/1 (水) II 講目	13回			
7/8 (水) I 講目			12回	日常生活援助の実践④ (模擬患者への寝衣交換)
7/8 (水) II 講目			13回	
7/15 (水) I 講目	14回	模擬患者に対する実践の評価	14回	模擬患者に対する実践の評価
7/15 (水) II 講目	15回	OSCEの説明	15回	OSCEの説明

ワークシート1

以下のような視点で、●●さんのフィジカルアセスメントを実施するため、講義で得た知識をもとに行動計画を作成する。

1. 行動計画			
1) フィジカルアセスメントに必要な物品			
2) 実施する項目と方法、それぞれの正常・異常の判断の視点			
項目	目的 (何のためにやるのか)	方法 (患者の状態を踏まえて)	正常から逸脱している場合には何が考えられるか
【バイタルサイン測定】	<例>		
・ 体温	・ 慢性閉塞性肺疾患に続発する呼吸器感染の有無を確認する。	・ 清潔行動や活動の直後を避けて行う。	・ 体温の上昇：呼吸器感染症
・ 脈拍			
・ 血圧			
2. 評価（演習を通して気づいた点を振り返り、計画と実践を評価する）			
学籍番号	グループ	氏 名	提出日 月 日

思考を刺激し、看護実践力の基礎を培うことにも繋がると考える。

文献

文部科学省（2004）．看護教育の在り方に関する検討会報告会．

文部科学省（2011）．大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告．

受付：2015年11月30日

受理：2016年 2 月26日